HUNTER=CERBERUS

狂々異語呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＨＵＮＴＥＲ＝ＣＥＲＢＥＲＵＳ

【Ｎコード】

Ｎ４３５２Ｙ

【作者名】

狂々異語呂

【あらすじ】

空色の髪と海のような深い青の瞳を持つ少女ルイトは、そこそこ腕の立つ剣士で賞金稼ぎ。そんな彼女の唯一無二の相棒は人間ではなく、なんと漆黒のケルベロス。一人と一匹（＋変態ストーカー）の苦労と苦悩、時々笑いありのハンティングな日々の物語。

賞金稼ぎ

賞金稼ぎ。
それは依頼をこなして報酬を得る者達の事だ。

依頼というのは実に様々で、人に害を為す魔族、魔物、モンスターの討伐であったり、商会の荷馬車の護衛であったり、畑仕事の手伝いであったり、時には好きな女の結婚式をぶち壊して欲しいなどの身勝手極まりないものまである。

しかし依頼の八割は前者で、下手をすれば命を落とす危険なものが多く、故に賞金稼ぎを名乗る者は腕に覚えのある荒くれ者がほとんどだ。

この地、フリーギル大陸。

フリーギルは世界地図で見ても一際大きく目立つ大陸だ。
地域によって気候や環境もバラバラで、住んでる人も生物も他の大陸の比ではない。

その分だけ犯罪人や危険種の数も増加するわけで、賞金稼ぎ達にしてみれば良い狩場でもあるのだろう。
大半の者は一攫千金を夢見て海を渡りこの地を踏む。

そうして毎日、命の危機と隣り合わせの中、自由気儘に戦っているのだろう。

狩り

ごおぉぉぉと低い唸りを上げて大気が振動する。
身体ごと持って行かれそうな突風。
少女は地面に長剣を突き立て耐える。

「来るぞ！」

彼女の相棒が直ぐ隣で叫ぶ。

「掴まれ！」

強い風の中、捕まりやすいようにと相棒は少女に身を寄せる。
少女は頷き長剣を抜くとすぐさま相棒の背にしがみ付いた。

直後、相棒と少女は宙を舞う。
いや正確には少女を乗せた相棒が高く跳躍したのだ。

今しがた彼らがいた場所には灼熱の炎が地を舐めるように広がっている。

「さっきよりブレスの勢いが落ちてるよ！」

「連続で出せる訳ではないらしいな。決めるぞ！」

落ちてくる彼らを食らおうと大口開けて迫る獲物の鼻先を踏んづけて、相棒は更に飛び上がる。

「頭だ！」

「任せて！」

少女は相棒から離れ、獲物の頭上へ降下する。
獲物が気付いた時にはもう遅い。
少女は獲物の脳天に長剣を刺し、切り裂いた。

悲痛な叫びとも、怒りの咆哮ともとれる絶叫。
獲物は鮮血を振り撒きながら少女を振り落とさんと首を振るが、一足先に少女が着地する。

「まだ息があるか……後は俺がやる」

重症を負いながらも少女を食らおうと牙を剥く獲物。
あろうことか相棒はその口に自ら飛び込んだ。

獲物はこれ幸いと相棒を咀嚼するために口を閉じた……が。
ぼんっと籠った様な破裂音。
同時に獲物の身体が一瞬だけ膨れ上がり、また萎む。
かと思うとそのまま白目を剥き横にどうと倒れ動かなくなる。

事切れた獲物の力なく開けられた口からなぜか煙が立ち上り、香ばしい匂いがした。
更にそこから、匂いにむせながらずるりと相棒が這いだした。

「やったね！倒せたよ！」

「……傷は頭だけだな」

嬉々として駆け寄って来る少女を余所に相棒は獲物の外傷を気にし

ている様だ。

「五体満足なら三倍以上の値は期待できるな」

満足そうな相棒。

少女もにっこりと頷き、目を輝かせた。

「それにしても……美味しそうだよね」

「食うなよ？」

一応少女に釘を刺して、相棒は巨大な獲物を改めて見た。
これを運ぶ為にもう一仕事。
骨が折れそうだ、と相棒は静かに溜息を吐いた。

青い少女と黒い犬

賞金稼ぎ達が狩った獲物を金に換える換金所。
基本的に換金は依頼を請け負った各地の酒場や宿屋で行うものだが、賞金の額、獲物の大きさが一定を越えた場合、特別な条件の依頼は、どんなに遠くてもこの換金所に訪れなければならない。

フリーギル大陸には、ある組織の計らいで実に二十か所以上の換金所が配置されている。
とはいえ、獲物を引きずりながら歩くとなるとかなりの面倒に違いはない。
無駄な労働を好まない者は換金所絡みの依頼を避けることもしばしば。

しかし多用性はあるためぶつくさ悪態を吐きながらも多くの賞金稼ぎ達はここに集まるのだ。
仲間の募集、狩りの自慢話、何より人伝の情報や噂話が目的の者も少なくない。

今日もこの換金所である噂で持ち切りだ。

最近、黒い犬を連れた賞金稼ぎの少女が次々と大物を狩っているらしい。

大の大人でさえ狩るのが難しい犯罪人やモンスターを少女が？
誰もが冗談だと嗤っている。
そんな事、ただの愉快な噂話に過ぎない。
この場のだれもがそう思っていた。

だが、その少女は唐突にやってきた。

「すいませーん！ドラゴン狩ってきたんですけど、丸々持ってきちゃって……建物の中に入りそうもないんで外で換金してもらえますかー？」

入口から叫びながら登場した少女は、肩まで伸びた空色の髪と海を思わせる青の瞳。
背には袈裟がけに背負われた長剣。

そして、その少女の足元には、影のように寄り添う一匹の黒い犬。

どよめきが走る。

真実を確かめようと外に出た賞金稼ぎ達が、視界に映された巨大な獲物に驚愕し、あんぐり開けた口が戻らなくなったのは言うまでもない。

◇　◇　◇

「思ったより貰えたねー。ドラゴン運んで疲れたし、お腹減ったし……今から高級レストラン行こよ、ヴィング。たまにはいいよね？」

換金を終え、大金を詰めた袋を背負う少女は、人通りのない道を進みながら隣を歩く黒犬に話しかけた。

傍から見れば犬に対しての独り言だが、少女にその気はなく、どこか返答を求めるような口ぶりだ。

大人しく歩いていた犬は少女を見上げ……

「ルイト、金遣いが荒いぞ。まずは銀行だ。……言っとくが獲物を仕留めて換金所まで運んだのは俺だ」

――――犬が喋った。

そして普通では有り得ない事を口にした。

「分かってるよ。ヴィングが強いおかげで強いモンスター狩れるんだもん。じゃぁ、どこでもいいから腹ごしらえしよう。ヴィングはドッグフードでいいよね？」

驚いた様子もなくにこやかに応える少女ルイトに、黒犬ヴィングがの中で何かがブチッと音を立てる。

「俺はケルベロスだ！！人間の前では仕方ないが、今は犬扱いするな！！」

心底心外だと牙を剥くヴィング。
そう、この黒犬ヴィングは実はケルベロスなのだ。

ケルベロスとは、黒い狂犬の姿で複数の頭部を持ち、地獄の番犬と恐れられる魔物だ。
人間が知る頭の数は三つだが、中には五十以上の頭をもつケルベロスもおり、他にも尾が蛇であったり、体内に強い毒を持つものもいるらしい。
ヴィング曰くそれは個性なのだそうだ。

語った当ケルベロスは喋る事以外、至って普通のケルベロスだが。
そうだとしても、今のように人里近くに入る時は人間に警戒されないように犬の姿をしている。

ちなみに何故、人間であるルイトとケルベロスのヴィングが共にいるのかというと……

一年ほど前。

森の中で凶悪なモンスターに殺されかけていた賞金稼ぎの少女、ルイトを、通りすがりの旅人ならぬ旅ケルベロスのヴィングが助けた。
命を救われたルイトは、形は違えど今しがた自分を殺そうとしていたモンスターと同じであろうヴィングに対して、恩返しの為に旅に同行すると言い出し、勝手に付いていくようになったのだ。

これが、一人と一匹の奇妙なコンビの始まりである。

とは言っても、恩返しをする為に同行しているはずのルイトは、今では逆にヴィングを連れまわして、自分の仕事を手伝わせたりしている。

その時点で、恩返しをする気があるのか疑わしいが、ヴィングはまったく気にしてない様子なのでいいのだろう。

「はいはい。ヴィングは凄いケルベロスだよ」

笑顔でヴィングの主張を軽くあしらい、辺りをキョロキョロし始めるルイト。

「それより、全然人いないね。いくら人通りが少なくても一人くらい歩いててもいいのに。せかっく美味しい店が近くにないか聞こうと思ったのにな……」

ヴィングは二つの意味で溜息を吐く。
ひとつは食欲ごときであしらわれた事への諦め。
もうひとつはルイトの言う人がいない訳だ。

ルイトは気付いていなかったようだが、換金所を出てからというもの、凄腕の少女賞金稼ぎを近くで拝見しようと、相当な数の野次馬たちがこそこそと後を付けて来ていた。
あまつさえ、勝負でも挑んでくるつもりだったのか闘気すら感じていた。

だが、その気配はいつの間にか消えている。

理由は見当がつく。
諦めて帰った訳ではない。
恐らくそこらの道端で……
考えたくもないものが浮かんできて、ヴィングは低く唸った。
「ヴィング？」
不思議そうに首を傾げる少女に、お前はもっと身近な危険に気を配るべきだ、と一言もの申しておきたかったがやめておく。
「何でもない。今の時間帯は一番人が少ないんだろう」
「仕方ないね。とりあえずお腹減って死にそうだから、何か食べよう！」
「だから銀行に……まぁ、いいだろう」
我慢できず走り出すルイト。
ヴィングは直ぐには付いて行かず、誰もいないはずの来た道を振り返る。
出てきた瞬間、噛み千切ってやるという意味を込めて。

◇　◇　◇

遠ざかるルイト達を影から見送りながら、背の高い男が呟く。

「腐れケルベロス……俺様に気付いたな」

見るからに怪しいその男は、その容貌が見えぬほど包帯を顔に巻きつけていて、微かに覗かせる双眸は、獲物を狙う獣のように鋭い光を帯びている。

「……うぅ」

不意に男の足下から苦しそうな唸り声が聞こえてきた。

「気が付いたか屑共。どうだ？俺様に踏まれてる気分は。最高か？」

足下の人の山を見下しながらニヤリと笑う顔だけミイラ男。

実に楽しそうだ。

ミイラ男に直に踏み付けられてる賞金稼ぎの男は、何とか立ち上がろうと顔を上げるが、ミイラ男はそれを許さない。

無慈悲にも再びその頭を踏み付ける。

「こうなんのも自業自得だな。てめぇ等が俺様の愛玩女を付け回したりするからだ。あれを付け回していいのは俺様だけなんだよ。覚えとけ」

言い終わると、男は人の山から降りて、ルイト達が向かった方へ歩を進めた。

「次は何してやるかな……ルイト」

緑の里の悲劇

緑の里ピルパウン。
雄大な山々に囲まれ、青々とした草原が広がり、澄み切った川が流れる緑豊かな里。
草原の所々に散りばめられたように佇む民家の煙突からは、うっすらと煙が出ている。
どうやら昼時らしい。
ルイト達はピルパウンを一望できる丘の上で、その美しい自然に心を和ませていた。
「ねぇ、ヴィング。本当にここで良かったのかな？」
「間違いない」
「こんなに平和そうなのに」
草の香りのする心地よい風が流れる。
どこか懐かしさすら感じるその風をルイトは胸いっぱいに吸い込んでみた。
犬の姿で横にいるヴィングは風に揺れる草花に鼻をくすぐられ、鬱陶しそうにくしゃみする。
「……犬のままだと色々面倒だ」
「抱っこしようか？」

「犬扱いするな！」

観光に来たわけではない。
当然のことながら、賞金稼ぎとしての仕事だ。

「どっからどう見ても平和だよ？……ウサギはいそうだけど」

「緑の里に出現し、里の人間を食らう化けウサギ……か。確かにこの状況では信じがたいな」

依頼の内容を知ってここに来たはいいが、想像以上に長閑で少し驚いている。

緑の里の化けウサギ。
ウサギに似たモンスターを人がそう呼んでいるだけだろうが、その姿は巨大なウサギそのものなのだという。
依頼の用紙には、人を食らうとも書いてあった。
おまけに今まで討伐成功例はない。
狩りに来た賞金稼ぎは皆逃亡、あるいは死んだのだろう。

「強い……んだよね？」

つい先日までドラゴン相手に果敢に立ち向かった少女とは思えないほど弱々しい声。
このモンスターにはかなりの高額が懸けられていた。
それだけ厄介で危険なのだ。
不安なのもわかる。

「お前が恐いなら引き返すか？」

ヴィングがわざと笑って見せると、ルイトも笑い返した。

「大丈夫！ヴィングもいるし！」

「フッ、当然だ。情報集めに行くぞ」

「うん！」

◇

◇

◇

。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4352y/

HUNTER=CERBERUS

2011年11月21日23時47分発行